



Title	教材「地図をいもどる」考(2)
Author(s)	佐野, 比呂己
Citation	北海道教育大学紀要. 教育科学編, 63(1): A9-A21
Issue Date	2012-08
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6813
Rights	

教材「地図をいろいろ」考（2）

北海道教育大学釧路校国語教育講座

佐野 比呂己

概要

本稿は、「教材「地図をいろいろ」考（1）」に続くものである。本稿では、筆者鏑木清方と随筆、また「地図をいろいろ」の原典である『蘆の芽』を取り上げる。教材として「地図をいろいろ」を研究する上で、その前提としたい。

「教材「地図をいろいろ」考」について

本稿は「教材「地図をいろいろ」考（1）」¹は、次のように構成されている。

- 一 教材「地図をいろいろ」
- 二 筆者・鏑木清方
 - 1 教科書、及び指導書
 - 2 事典等

- 3 鏑木清方年譜
- 4 日本画と清方

【資料】教科書教材本文

5 随筆と清方

(1) 随筆の分量

清方は多数の随筆をこの世に残している。芳賀徹²は清方の随筆の数の多さについて次のように述べている。

『鏑木清方文集』が全八巻で出るといふ予定ですが、このほかに、またさらにふえるかもしれませんね。さつき見せていただいた清方の本の『風俗画技法』、ああいうものもぜひ最後に入れていただきたいものですね。そういうものを入れますと、大変な分量³を残した画人だということになります。予定は全八巻で、一冊で二五〇ページ平均ですね。生涯に互って、数多い随筆、回想記のたぐいを書かれ、その他に紀行文とか劇評とかいうようなものまで含めて近代日本の画家としては珍しいほどに、いい文章をたくさん書かれた。それが清方の一つの特徴であるものだろうと思います³。

昭和五十四年（一九七九）二月から昭和五十五年（一九八〇）九月にかけて、長女清子の夫であり演劇学者の山田肇は『鏑木清方文集』（白風社）全八巻を編集している。

次の表は、『鏑木清方文集』の各巻の書誌情報をまとめたものである。各

巻末に山田肇による「あとがき」が記されているが、ここでいう「頁数」とはその「あとがき」を抜いたものである。

●『竈木清方文集』書誌情報

巻数	副題	発行日	配本順	頁数
一	制作余談	昭和五十四年（一九七九）八月	4	二九八
二	明治追懐	昭和五十四年（一九七九）十一月	5	三一四
三	先人後人	昭和五十四年（一九七九）五月	3	二九四
四	春夏秋冬	昭和五十四年（一九七九）三月	2	二一三
五	名所古跡	昭和五十四年（一九七九）二月	1	二六〇
六	時粧風俗	昭和五十五年（一九八〇）二月	6	二五〇
七	書壇時事	昭和五十五年（一九八〇）六月	7	四一二
八	随時随感	昭和五十五年（一九八〇）九月	8	四四二

芳賀は「一冊で二五〇ページ平均」しているが、実際は一冊平均約三二〇頁となっている。さらに、配本が後になるほど、ページ数が多くなっていることが確認できる。二五〇ページに収められる程度のもではなかったのである。優れた随筆が多く、そこからの選択は困難なことであつたらう。山田肇も編集に苦心したことがうかがえる。

また、鈴木進は『続こしかたの記』（中公文庫 昭和五十二年（一九七七）二月）の「解説」の中で「刊行された随筆」として、『銀砂子』から『続こしかたの記』までの十五冊を掲げている。清方が日本画家であるにもかかわらずそうとうな分量の文章を残したことがわかる。

(2) 第一随筆集『銀砂子』出版まで

清方が本を出すきっかけをつくつたのは、企業家・小林一三⁵であつたとい

う。

処女出版というのも烏澁⁶がましいが、自分の趣味の赴くままに成つたものを一冊の本に纏めたのは、そのころ三井の箱崎倉庫に勤めていた小林一三さんが、自分の書いたものを出版している岡倉書房を紹介して、出させてくれたのに始まる。

小林は岡倉書房から『奈良のはたごや』という随筆集を昭和八年（一九三三）九月八日に出版している。その縁で清方に岡倉書房を紹介したというのだ。

『銀砂子』の装幀は、清方の希望により小村雪岱⁷が担当した。雪岱は、泉鏡花の戯曲『日本橋』（千章館 大正三年 一九一四）の装幀を行ない、以後、鏡花の作品を中心に装幀の仕事を手がけている。清方も鏡花の作品に挿絵を提供している。鏡花の本づくりの関連から雪岱に装幀を依頼したのであろう。

『銀砂子』の「序」には、清方の雪岱への感謝の意が記されている。

装釘に小村さんを煩はしたことは、草餅を盛るに色鍋島の皿をもつてしたにも似てゐるが、せめて器だけはといふ心。

雪岱さんの好意を謝す。

「柳さくらの散り布く砂地にこまかい紅蟹の列をつくつたのを表紙に現し、外宮には桔梗色に銀文字の標題が貼⁸つてある」装幀を清方は気に入るのであつた。

清方の文筆活動について、山田肇は次のように述べている。

大正に入って、挿絵を廃し、自由制作を以て立つようになると、需められるままに、随筆を書き始めた。しかし、清方が帝展の運営に心

を碎いた大正後半までは、清方が最も熱心に書き続けたのは、帝展評を始めとする展覧会評であった。清方がしきりに随筆を書くようになったのは、昭和に入ってからであり、昭和九年から昭和十九年までの間に、清方は、六冊の随筆集を世に送った¹¹。

清方が多くの随筆を書くようになったのは、昭和に入ってからであり、昭和九年（一九三四）の『銀砂子』以降、昭和十九年（一九四四）までに六冊の随筆集を発行する。

(3) 岩本和三郎の尽力

これだけ多くの本を発行するにあたって、大きな尽力を果たしたのが岩本和三郎である。

昭和九年（一九三四）五月に『銀砂子』を発行した四ヵ月後に第二随筆集『築地川』が斎藤昌三¹²の書物展望社から出版される。その際に、清方の担当になったのが岩本であった。岩本は『文体』『随筆趣味』の編集にも携わった人物である。『随筆趣味』の第一号（昭和九年（一九三四）十一月十日発行）は、清方の愛用の印三種が表紙に飾られ、加えて清方の「秋」という随筆から始まる。その編集者兼発行人が岩本なのである。清方との縁、清方の随筆への評価がうかがえるところである。

清方は、『続こしかたの記』の中で、岩本と自身の関係について次のように述べている。

その時分次の出版の話が進んで同じ昭和九年の秋九月には新富町の書物展望社から軼入のたいそう凝った仕立^{したて}の「築地川」が世に出た。

この社は斎藤昌三氏の至極良心的な出版経営で知られていたが、奥附に署名のある岩本和三郎さんとの接近がここに始まる。岩本さんは東

京堂で仕上げた生えぬきの出版業者で何の縁か私の余技の仕事に肩を入れてくれた。この本の出版にも自分から進んで校正に当り、先ず趣味版として三百部の限定本を拵^{しと}えた。「銀砂子」が出てから三ヵ月を隔てたばかりである。大体何かに書いたものだが本の名に付けた「築地川」はこの書のために新しく書き下^かした。この装釘は厚い鳥の子紙へ、その頃明石町の海岸にいつも碇泊していた二本マストの商船を描いた。尚おこれには友人鏡花が美しい序文を寄せてくれた。わが子をお祭りに出すようだという譬^{たとえ}をそのまま岩本さんの気の入れかたをありがたいことに思った。

(中略)

江戸川の流れに近い小岩、篠崎のあたりでは、平野の果^はに煤煙の澱^{たぎ}む本所一帯まで田畑のつづくここいらまで「時局の認識について」陸軍少佐何のなながしと記された建札が目につく。時局に不要なものの存在が日に日に窄められてゆく時世であった。

その中でも岩本さんは「御濠端」と云う、当時朝日新聞が挿絵入の随筆を画家に求めたうちの私の分を四六倍判の凝った限定版にしてくれた。

(中略)

やがて時局は進んで出版はいよいよ窮屈になった。それでも岩本さんはその時期として許される限りの装いを凝らし、戦争のうちとは思われぬ美しい選集二部ずつに纏めたものを二回まで出している。もう東京に危急が迫って地方へ疎開の準備中過労のために急逝されたという知らせを疎開先で受けた。余技に過ぎない私の書いたものを本にしてそれを悦んでくれた人。岩本さんを喪って私は先々に充たされない寂しさを懐いた¹³。

(4) 清方にとっての随筆

清方は随筆を書くことを「余技の仕事」¹⁴であり、「素人の不さみ」¹⁵であるとしている。あくまでも本業は日本画家であり、随筆を書くことは「余技」に過ぎないというのである。

『連翹』の序文に清方の随筆観をうかがえる一節がある。

小説だの、戯曲だのとなると、これはその道で多少とも年季を入れた人でなければ物にならない。そこへゆくと随筆は手紙をかくか、日記をつける延長のやうなものでも、何とか形だけは付いてゆく。

で、何をか随筆といふ……先賢の示すところに依れば、意の之くに随つて、思ふこと滞りなくすらすらと、あとさき次第を問はず、それが記録めいたものでも、世の中のありとあらゆる事象についての筆者の感想なり、内容の深淺、それはそのままかく人の生地^{なかみ}の出来に任せ、でも、読むに平談平語の調を失はぬ、どうやらそんなのを随筆といふのであらう。¹⁶

清方にとって随筆とは、「手紙をかくか、日記をつける延長のやうなもの」であり、自身の心情が素直に表現できるものであった。

随筆を書くこと自体が、居心地がよく楽しいものであったことが次の一節からうかがえる。

元来私^{もともし}のやうな文事に慣らはぬものの筆のすさみは、始めから何の規にも従ふことを弁へぬ。知らざるをよしとはゆめゆめ思はないが、時に画筆を描いて悔ゆる時のないのも、聊かその心易さを愉しむ思ひあればこそである。¹⁷

一方で、清方は日本画を描くことと随筆とは離れたものとは思っていない。例えば、第一随筆集『銀砂子』の序文には次のような記述がある。

文字の形こそしてはゐるが、その多くは私の本業としてゐる絵画の延長若しくは派生に過ぎないことに心づいた。¹⁸

随筆を書くことが日本画を描くことの「延長」「派生」であるとしている。

日本画を描くこととの連関性がうかがえる。

また、第二随筆集『築地川』の序文には次のような記述がある。

絵となるも文となるも、それはそこに現はれた形の差だけのこと、作者は別に他の仕事をしてゐるわけではない。どう形を変へて見ても、つまるところは作者の生地だけのものしか出てはゐないのである。¹⁹

随筆も日本画も、対象となるものの根は同じであり、清方自身の感覚が絵なり文章なりに現れたというのである。両者が離れた存在であるとは考えていないのである。

清方は、『清方随筆選集』に次のように記している。

作者の随筆は本業たる絵画と不可分の関係あり。絵画の表現に適合するもの文に依り情を舒ぶ。²⁰

それでは、清方は、どんな時に随筆に取り組むのだろうか。随筆に取り組む動機について、次のように述べている。

私の文を綴る、何も文人の真似をするのが目的ではない。画はそれ無声の詩といふ、語なくて意は足れりとすると雖も、且暮口を緘^とぢて

絵絹にばかり感懐を托しきれない場合もある。そんな時、画室と決めたある室の一隅、南向きの机に凭つてペンを取り上ぐるのが慣ひとなつて年久しい。²¹

本業に取り組み中で、それだけでは自分自身の思いを十分に表現できない場合がある。そんなときに、清方は随筆に取り組みというのである。画家は、スケッチだとか、本制作の下絵だとか取り組む姿勢が気楽だけに、かえって直接的な感興が素直に出てくる場合がある。清方の場合はそれが文章にあたるというのである。清方にとって、文章とは、日本画の「延長」であり、「派生」であり、「同じ根」にあるのだ。

清方を論じるとき、さらに清方の日本画を論じるときに、随筆の存在は無視することはできない。美術評論家の鈴木進は、科学者である寺田寅彦を取り上げ、清方の随筆について、次のように述べるのである。

清方画伯は、単に画人ではない、寺田寅彦先生が、科学者であると共に随筆を以て文人であったと同様に「文人清方」であることを忘れては「清方論」を書くことができないと思う。

清方画伯の文章を読むと、画伯でなくては出ない陰翳を読みとることができし、その随筆は、清方画伯を語るにはなくてはならない楯の一面である。²⁴

清方の文章に接することは、清方の日本画を鑑賞する際に、広がり深みを感じさせるものである。

(5) 随筆家としての清方

平成二年(一九九〇)七月に「村の名前」で芥川賞を受賞した辻原登は清

方の文章について次のように述べている。

ふと思うことがある。鏗木清方の文章の魅力に触れるたびに、彼が文人・小説家の道を歩んでいたら、間違ひなく荷風、谷崎と並ぶ小説を物したことだろう、と。²⁶

辻原は、清方の文章力を高く評価し、文筆の道に進んでいたとするなら、小説家として、永井荷風、谷崎潤一郎と肩を並べていたとしている。

小説家の芝木好子も同様に清方の文章力を高く評価し、次のように述べている。

清方先生が絵の代りに小説を書いたとする。父上は戯作者の條野採菊であり、鏡花、一葉を暗誦するほどの小説好きである。作家として一家を成す資質に恵まれているのは疑いない。²⁷

芝木も、清方が絵筆の代わりに文筆の世界に身を置いたとしても、成功したとしている。

坂崎重盛も、「日本画家の清方は随筆家としても一流」²⁸であり、「随筆家としても比類なき才能を發揮した」と高く評価する。²⁹

三 原典『蘆の芽』

1 教科書、及び指導書

「ろくをさばく」の原典について、教科書頭注に次のような記述がある。

◇蘆の芽 一九三八年 相模書房刊

また、教師用指導書の「筆者・原典」の項においては次のように記述されている。

この教材は随筆集「蘆の芽」（一九三八年 相模書房刊）の中の「地図を彩る」の部分を使った。

『蘆の芽』の奥書によれば、昭和十三年（一九三八）六月二十日に相模書房からの発行となっている。

『蘆の芽』は清方にとって四冊目の随筆集となる。昭和九年（一九二四）に『銀砂子』（岡倉書房）、『築地川』（書物展望社）と立て続けに世に出し、昭和十二年（一九三七）に三冊目の随筆集『褪春期』（双雅房）を発刊した。さらに、昭和十三年（一九三八）には『御濠端』（双雅房）も出版している。

昭和十三年（一九三八）は、清方の年齢は満六十歳である。ちょうど還暦の年にあたる。『蘆の芽』は還暦記念の書でもあるのである。装幀も清方自身を担当している。

2 「地図をいろどる」

原典『蘆の芽』の目次は、次の通りである。

はしがき	昭和十三年（一九三八）五月
蘆の芽	昭和十二年（一九三七）四月
火を懐しむ	昭和十二年（一九三七）十月
身辺近事	昭和十二年（一九三七）九月
時の流れ	昭和十二年（一九三七）三月
春侘びし	昭和十三年（一九三八）一月

あるはずの滝 昭和九年（一九三四）十二月
 明治風俗十二ヶ月 昭和十年（一九三五）六月
 かるた（一月）

梅屋敷（二月）

花見（四月）

金魚屋（六月）

氷店（八月）

長夜（十月）

平土間（十一月）

挿画家の暮らし 昭和十二年（一九三七）一月

美人説 昭和十二年（一九三七）一月

幻の町 昭和十二年（一九三七）一月

娘のこのみ 昭和十二年（一九三七）一月

生活思ふうま、 昭和十二年（一九三七）五月

溪仙詩情 昭和十二年（一九三七）六月

芸術院初会 昭和十二年（一九三七）六月

花鳥のはなし 昭和十二年（一九三七）八月

新江東図説 昭和十二年（一九三七）九月

常緑松園 昭和十二年（一九三七）十二月

日本髪 昭和十三年（一九三八）二月

はやりかぜ 昭和十三年（一九三八）二月

一画一文 昭和十三年（一九三八）四月

今井橋の富士

堀切

行徳の常夜燈

浜名湖畔

松岡君とのつきあひ 昭和十三年（一九三八）四月

金鈴社

帝展

改組、又改組以後

地図を彩る 昭和十三年（一九三八）三月

香を偲ぶ 昭和九年（一九三四）十二月

婦系図その他 昭和十二年（一九三七）一月

しばるばなし 昭和十二年（一九三七）三月

河合武雄 昭和十三年（一九三八）一月

劇評 昭和十三年（一九三八）一月

岡崎と夢の市蔵

快作「鶴八鶴次郎」

「吉野山」と「鎧櫃」

芝居見物今昔 昭和十三年（一九三八）四月

教師用指導書の「筆者・原典」の項にある通り、「地図をいろどる」の原題は「地図を彩る」であり、昭和十三年（一九三八）三月に発表されたことが確認できる。

ここで、注目したいのは「松岡君とのつきあひ」という文章である。「松岡君」というのは、日本画家の松岡映丘³⁰のことである。松岡が亡くなったのが昭和十三年（一九三八）三月二日のことである。この文章の発表が同年四月であり、松岡への清方の追悼文にあたる。

金鈴社³¹を機縁とした松岡との交友について、清方は次のように綴っている。

他の三君は私どもから見ればずっと先輩でもあつた関係もあるし、松岡君とは同人の中で比較的少壮であつたせぬもあり、芸術の境地が甚だ接近してゐたこととりわけ、隔つるところ無く直ちに交り結び得たわ

けであつたらう。³²

松岡といえ、その実兄は柳田国男である。柳田高等学校国語教科書にこの「松岡君とのつきあひ」の直後にある「地図を彩る」を所収したことはとても興味深いところがある。

3 タイトル

『蘆の芽』の巻頭（二―三頁）には「つものぐむ蘆」と題した「はしがき」が綴られている。

つものぐむ蘆

蘆の芽は、あしかひ、あしづの、などと古語に呼ばれてゐるが、その芽のつものぐむ時分を、ついぞ今まで気をつけて見たことはなかつた。

この随筆集の巻初においた一文にある、江戸川区篠崎の河原に蘆の芽を抜いた時は、漸くそれと判ずるまでの、僅かに赤い芽を地上に現はしただけであつたが、ことしの春、堤の桜八分のながめ、江戸川の水ぬるみ、武蔵、下総の流れゆきかふ岸辺の洲のひたひた水のよせるなかに、たけ六七寸、生きもの、やうに、すくすくと簇^{むら}つて萌え出でた、夥しい角形^{つのがた}の芽が、ひろい渚^{なみさき}にくろみわたつてゐるのをはじめて見て、天地^{あめつち}のわかる、時、物あり、かたち葦芽^{あしかひ}の如き、といふ神話のすぐれた形容がよく解つた。

他の木の芽、草の芽には見られない、底知れぬ繁殖を思はせるところがあつた。乾いた土の上と違つて、湿つた埒^{ひら}の中に生ひ出づるこ

とが、殊にさう思はせるのか知れない。

昭和十三年五月

鍋木 清方

清方は、昭和十三年（一九三八）になってから、何度か江戸川べりの篠崎を訪問している。

一回目は、一月二十五日、亀戸天満宮の鸞替神事に行った帰り道に寄ったのであった。

二回目は、三月末であった。そのときの様子は「随筆集の巻初においた一文」である「蘆の芽」に次のように綴られている。

この前来た時に河原を歩きながら、地上に物を求めてゐる私を、案内してゐたMが見つけて何を探すんです、と訊くので、もう蘆の芽が出てゐる時分だと思つて、と柔かい土から二三寸細い筍のやうに伸びて簇生してゐるのを摘み取ると、ありやあ真菰ですよ、といふ、また他の芽を見つけると、そりやあ萱です、といつて、そこから数歩汀の方へ寄つたところに、二寸ばかり顔を出してゐる蘆の芽を取つてくれた。³³

「はしがき」の「江戸川区篠崎の河原に蘆の芽を抜いた時は、漸くそれと判ずるまでの、僅かに赤い芽を地上に現はしたただけであつた」とする記述と重なる部分である。

三回目は、「それから半月ばかり経³⁴」つた四月十二日、再び江戸川べりの篠崎を訪れるのであった。

点を打つたやうに葉尖を見せた蘆の穂は、もうそこから中にすすくと生えてゐて今では紛うべくもない、尺に近く伸びたのさへある。水が寄せて、そこは、土も川泥になつてゐるやうなところでは、葉形がちやんと解るまでに伸びて風に揉まれてゐるのを見ると、この蘆が二尺となり三尺となり、人の丈を没するまでに伸びて、この広い河原が一面の蘆原になる。³⁵

「はしがき」の「ことしの春、堤の桜八分のながめ、江戸川の水ぬるみ、武蔵、下総の流れゆきかふ岸辺の洲のひたひた水のよせるなかに、たけ六七寸、生きもの、やうに、すすくと簇^{むら}つて萌^もえ出でた、夥しい角形^{つのがた}の芽が、ひろい渚^{なみ}にくろみわたつてゐる」と重なる部分である。この情景を清方は初めて見たというのである。この情景から清方は「天地開闢」の神話に登場する「葦芽」に思いを馳せる。

古に天地未だ割れず、陰陽分れず、渾沌にして鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其の清陽なる者は、薄靡きて天に為り、重濁なる者は、淹滞りて地に為るに及びて、精妙の合搏すること易く、重濁の凝竭すること難し。故、天先づ成りて地後に定まる。然して後に神聖其の中に生れり。

故曰く、開闢る初めに、洲壤の浮漂へること、譬へば游魚の水上に浮べるが猶し。時に天地の中に一物生れり。状葦牙の如く、便ち神に化為る。³⁶

「葦牙」とは、葦芽、葦の若芽、蘆の芽のことである。『日本書紀』巻第一「神代上」の冒頭の一節を指すのであろう。清方は「状葦牙の如く」という形容の妙を感得したのである。

その理由は、「底知れぬ繁殖」力とぬかるみという環境の中でも創出され

る生命力からであろう。蘆の芽に神のごとく自然の力を清方は思わずにはいられなかったのである。

西洋の映画で見ると、割合に都会に遠くないところで、美しい田舎を見る。こちらでは都会に近い田舎は、何でも彼でも都会らしく粧はなければ美しくならないと思つてゐるらしく、さうして安価な近代化が田舎に根を下してゐるほんもの、美しさを、段々駆逐して行つてゐる。

この江戸川に沿ふ僅な地帯には不思議なほど東京かぶれの何物も見出さない、かういふところへ抜け出して来て見ると、抜け出してという表現を切実に感ずるほど、常に住んでゐる都会の乱雑さを対照せざるにゐられない。³⁷

篠崎は「美しい田舎」であり、乱雑な東京から抜け出し安寧を求め、何度もこの地を訪れる清方の姿が浮かぶ。

「美しい田舎」は何も篠崎だけではなかった。

今の煙の町も私が知つてゐた昔の葛飾平野であつた頃はやはり今見るとこの篠崎の田舎道と何も変ることはなかった。見渡す限りの田圃中にこんもり茂つた吾嬬の森だの、次郎兵衛の梅で知られた名主の莊園などを回想すると、黄楊や榎のよく積んだ生垣に囲まれたそこいらの農家もいつまでこのまゝに保たれてゆくかといふやうなことを考へずにはゐられない。³⁸

清方が住んでいた「昔の葛飾」の姿でもあつたのである。自然が残る篠崎に「昔の葛飾」を清方は発見し、ノスタルジーに浸っているのではないだろうか。

また、当時の時局について、清方は次のように憂いている。

江戸川の流れに近い小岩、篠崎あたりでは、平野の果に煤煙の澱む本所一帯まで田畑続くここいらまで「時局の認識について」陸軍少佐何のなかがしと記された建札が目につく。時局に不要なものの存在が日に日に窄められてゆく時世であつた。³⁹

しかし、篠崎の地においては気にならないらしい。

初めて来た日にはとどころの辻に、時局の認識について、陸軍少佐の何の某といふ厳しい講演の辻ビラを見かけたが、今度は衆議院議員候補の立看板が蒲公英の中に立つてゐる。

(中略) 古風な農家で草餅のご馳走になりながら、広い田畑を眺めて話してゐれば、時局講話の辻ビラも、立候補の立札も、たゞ春風や春風やの景物でしかない。⁴⁰

春風の前では、目障りなものも景物の一つになつてしまつたのである。以上のことから、自然への敬意と、古きよき江戸へのノスタルジーが「蘆の芽」というタイトルに込められていると考える次第である。また、これらの思ひは清方の絵にも共通していることでもあるのだ。

注

1 『釧路論集』第四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十二年(二〇一〇)十一月 一—一四頁

2 はがとおる 芳賀徹 一九三一—昭和六一

昭和後期平成時代の比較文学者。

昭和六年(一九三一)五月九日生まれ。昭和五十年(一九七五)東大教授、平成三

年（一九九二）国際日本文化研究センター教授。大正大教授をへて、平成十一年（一九九九）京都造形芸術大学長。近代日本の洋学、文学、美術などを中心に比較文化史研究をすすめる。『平賀源内』（朝日評伝選）朝日新聞社 昭和五十六年（一九八一）七月）でサントリー学芸賞（芸術・文学部門）、『絵画の領分―近代日本比較文化史研究』（朝日新聞社 昭和五十九年（一九八四）四月）で大仏次郎賞、平成二十三年（二〇一一）に『藝術の国日本 画文交響』（角川学芸出版 平成二十二年（二〇一〇））蓮如賞受賞。山形県出身。東京大学教養学部教養学科フランス分科（第一期生）卒業、東京大学大学院比較文学比較文化専修課程修了（第一期生）。

3 芳賀徹・高階秀爾・小林忠・山田肇「討論 清方の文章（上）」『清方文集 月報4』白鳳社 昭和五十四年（一九七九）八月 一頁 芳賀徹の発言（尚、この討論は昭和五十三年（一九七八）九月十六日、鎌倉で行われたものである。）

4 三〇五―三〇六頁

5 こばやしちちぞう 小林一三 一八七三―一九五七 明治六―昭和三十二

大正・昭和時代の実業家、財界人。都市近郊私鉄経営の先駆者。阪急、東宝などの創始者で、新機軸を導入して私鉄経営のモデルをつくった。

明治六年（一八七三）一月三日、小林甚八・いくの長男として山梨県巨摩郡葦崎町（葦崎市）に生まれた。明治二十五年（一八九二）慶応義塾を卒業、小説家を志したが都新聞入社を果たせず、明治二十六年（一八九三）三井銀行に入ったが不遇のうちに明治四十年（一九〇七）初めに退社した。一時、阪鶴鉄道監査役を務めたのち、岩下清周・飯田義一らのすすめで、明治四十年（一九〇七）十月箕面有馬電気軌道の創立に参画、専務となった。箕面公園の動物園設置、宝塚新温泉の開場、宝塚少女歌劇の創設（昭和九年（一九三四）宝塚の少女唱歌隊から）、豊中グラウンドの建設、沿線住宅地の開発、パンフレットによる広告など、電鉄経営に組み合わせる斬新なアイデアを採用、路線を拡大して、乗客を誘致し田舎電車を屈指の電鉄会社に育てた。昭和二年（一九二七）には阪神急行電鉄（大正七年（一九一八）箕面有馬電気軌道を改称）の社長となり、昭和四年（一九二九）には大阪梅田のターミナルパート阪急百貨店を開業、会長に就任した。その独創的な経営戦略は私鉄経営の模範とされた。また昭和三年（一九二八）には三井銀行の池田成彬に乞われて東京電燈副社長（昭和八年（一九三三）社長、現東京電力）となって同社の再興に努め経営立て直して評価される一方、目蒲電鉄・東横電鉄・昭和肥料・三越・日本軽金属の重役を務めたほか、興行面では昭和七年（一九三二）東京宝塚劇場を設立し、日劇、帝劇を合併して有楽町に娯楽センターをつくり、映画事業にも進出して東宝映画を創立（昭和十八年（一九四三）に合併して東宝となる）し松竹に対抗した。実業界で「今太閤」と呼ばれた。昭和十五年（一九四〇）には第

二次近衛内閣の商工相となったが、革新官僚と対立して昭和十六年（一九四一）辞任、貴族院議員に勅選された。昭和二十年（一九四五）幣原内閣の国務大臣兼戦災復興院総裁に就任したが、間もなく公職追放された。昭和二十六年（一九五二）追放解除後は、東宝社長として同社の再建を果たし、またコマ劇場を大阪・梅田と東京・新宿に設立し、日経連常任理事をも勤めた。昭和三十二年（一九五七）一月二十五日死去。八十四歳。法名は大仙院殿真覚逸翁大居士。墓は大阪府池田市綾羽の大広寺にある。『小林一三全集』（全七巻）ダイアモンド社 昭和三十六年（一九六一）十一月―昭和三十七年（一九六二）八月）がある。

三宅晴輝『小林一三』（現代伝記全集）八 日本書房 昭和三十四年（一九五九）四月）

小林一三『小林一三 逸翁自叙伝』（人間の記録）二十五 日本図書センター 平成九年（一九九七）六月）

6 鍋木清方『続こしかたの記』中央公論美術出版 昭和四十二年（一九六七）九月（鍋木清方『続こしかたの記』中公文庫 昭和五十二年（一九七七）二月 一八八頁）

7 こむらせつたい 小村雪岱 一八八七―一九四〇 明治二十一―昭和十五

大正・昭和初期の日本画家。

明治二十年（一八八七）三月二十二日埼玉県川越市に生まれる。本名泰助。四歳のとき父を失い、小学校高等科を卒業後上京して、外務省の役人安並賢輔宅に書生として住み込みながら勉強し、下村観山、松岡映丘らにまなぶ。明治四十一年（一九〇八）に東京美術学校を卒業。この年より約三年間国華社に勤め、口絵の原画の模写の仕事をした。翌年、安並家の養嗣子となる。国華社に勤務のころより泉鏡花と親交を結び、泉鏡花の「日本橋」をはじめ多くの作品の装丁や、邦枝完二「おせん」「お伝地獄」の挿絵で知られる。また大正八年（一九一九）より四年間、資生堂意匠部に勤務した。その後新聞・雑誌の挿絵を描くほか、母校に委嘱されて『北野天神縁起』などを模写した。昭和十年（一九三五）国画院成立に際し同人となる。雪岱の展覧会作品はかならずしも多くないが、本の装丁や挿絵、また舞台や映画の美術考証や装置など、多方面に活躍した。その特色ある繊細な美人画は多くのファンをつくった。昭和十五年（一九四〇）十月十七日死去。五十四歳。埼玉県出身。旧姓は小松。

星川清司『小村雪岱』（平凡社 平成八年（一九九六）一月）

8 注6『続こしかたの記』 一八八頁

9 鍋木清方『銀砂子』序『銀砂子』岡倉書房 昭和九年（一九三四）五月（山田肇編『鍋木清方文集 八 随時随感』白鳳社 昭和五十五年（一九八〇）九月 四三二頁）

10 注6『続こしかたの記』 一八八頁

- 11 山田肇「後記」(『鑄木清方随筆集』岩波書店 昭和六十二年(一九八七)八月二九三頁)
- 12 さいとうしょうぞう 齋藤昌三 一八八七—一九六一 明治二十一—昭和三十六
大正、昭和時代の書物研究家、著述家。
明治二十年(一八八七)三月十九日神奈川県高座郡座間町(現・座間市)生まれ。
大正十三年(一九二四)から神奈川県茅ヶ崎にすみ、雑誌『いもづる』『書物往来』などを創刊。昭和六年(一九三一)書物展望社を設立。『現代日本文学大年表』(改造社版)を編集した。昭和三十六年(一九六一)十一月二十六日死去。七十四歳。名ははじめ政三(しようぞう)。号は未鳴、少雨莊(叟)など。著作に『書物誌展望』(八木書店 昭和三十年(一九五五)五月)、『書痴の散歩』(書物展望社 昭和七年(一九三二))など。
- 13 八木福次郎『書痴齋藤昌三と書物展望社』(平凡社 平成十八年(二〇〇六))
注6『続こしかたの記』 一八八—一九一頁
- 14 注6『続こしかたの記』 一八九頁
- 15 鑄木清方「『築地川』後記」『築地川』書物展望社 昭和九年(一九三四)十月(注9『鑄木清方文集 八 随時随感』四三四頁)
- 16 鑄木清方「『連翹』後記」『連翹』芸艸堂出版部 昭和十八年(一九四三)七月(注9『鑄木清方文集 八 随時随感』四三九—四四〇頁)
- 17 注16『連翹』後記』四三九—四四〇頁
- 18 注9『銀砂子』序』四三〇—四三二頁
- 19 注15『築地川』後記』四三二—四三四頁
- 20 鑄木清方「『清方随筆選集』附記」『清方随筆選集』双雅房 昭和十九年(一九四四)九月(注9『鑄木清方文集 八 随時随感』四四二—四四三頁)
- 21 注15『築地川』後記』四三二—四三四頁
- 22 すぎすすむ 鈴木進 一九二—二〇〇八 明治四十四—平成二十
昭和、平成の美術評論家、明治四十四年(一九一一)八月十四日静岡県生まれ。昭和二十七年(一九五二)美術評論界連盟の結成の際、幹事として参加。東京都庭園美術館名誉館長。日本美術史を専門とし、江戸時代の文人画を中心に研究。平成二十年(二〇〇八)七月十六日死去。九十六歳。
- 23 てらだとらひこ寺田寅彦 一八七八—一九三五 明治十一—昭和十
寅日子。
明治から昭和時代にかけての物理学者、随筆家。筆名吉村冬彦、俳名藪柑子または寅日子。
明治十一年(一八七八)十一月二十八日、東京府麹町区麹町平河町に生まれる。高

知県士族、陸軍會計監督、寺田利正の長男。母は亀。幼時を父の郷里の高知ですごす。高知県立尋常中学校より、明治二十九年(二八九六)に熊本第五高等学校にはいり、田丸卓郎(明治五—昭和七年(一八七二—一九三二))に物理学を学び自然科学への眼を開かれる。明治三十二年(一八九九)東京帝国大学理科物理学科に入学、明治三十六年(一九〇三)卒業、大学院に入り実験物理学を専攻する。明治四十一年(一九〇八)尺八の音響学的研究で理学博士を得る。明治四十二年(一九〇九)東京帝国大学助教となり、同年地球物理学研究のために外遊してドイツほかヨーロッパ各地とアメリカを訪ね、明治四十四年(一九一一)帰国。大正五年(一九一六)教授となる。実験物理学、気象学、地球物理学の研究にしたがい分野に独創的な業績をあげた。明治四十五年(一九一二)末ごろからX線の結晶透過の実験(ラウエ斑点)という開拓的な研究に着手し、大正二年(一九一三)イギリスおよび日本の学術誌に報告文を発表して、結晶格子中の網平面によるX線反射の条件を論じた。これはいわゆるブラッグ条件と密接に関係する業績であって、協力者であった西川正治とともに「ラウエ斑点の撮影に関する研究」で大正六年(一九一七)の帝国学士院恩賜賞を受けたが、寅彦はブラッグに後れたとしてまもなくこの方面の研究から遠ざかった。大正十年(一九二一)東京帝国大学航空研究所員、大正十三年(一九二四)理化学研究所員、大正十五年(一九二六)東京帝国大学地震研究所員となる。学士院会員・学術研究会議員に選ばれる。昭和二年(一九二七)A・ウエゲナーの大陸移動説をとり入れた日本海形成論を唱え、昭和五年(一九三〇)よりは割れ目の物理学を開始し、ガラス板の破壊実験を行うとともにその発想を生命にまで広げ「割れ目と生命」の論文を書いた。流体、コロイド、粉体、放電、破壊、燃焼、視覚などにかかわる実験や考察を多角的に展開し、また地震・火災の害や防災について論じた。一貫する関心事は、従来の決定論的な枠組みに入りきれない不安定現象、統計的現象、形態など新しい物理学の建設であったといえる。昭和十年(一九三五)十二月三十一日東京市本郷区駒込曙町の自宅において死去、年五十八。墓は高知市東久万の寺田家墓地にある。寅彦は、当時ヨーロッパの物理学の最先端で推進されていた量子論のような革命的な方向は日本人には参加できないものとみなし、それよりもみずからの日常世界に科学者の眼を向けようとしてさまざまな独創的な道をきりひらいている。その科学上の仕事は主として応用物理学の面になるが、墨流しや尺八の研究などは、独自の「寺田物理学」をひらいたものとして、評価される一面、趣味的で二流の物理学だとして、主流の物理学者から批判されることもある。科学者としての活動と平行して、活発な文筆活動を展開し多数の随筆や俳諧作品を残した。熊本の第五高等学校で夏目漱石に英語、俳句を学んだ。漱石の紹介で上京後正岡子規を訪ね、雑誌『ホトトギス』に随筆小文を発

表した。やがて高浜虚子らの文章会に出席、ドイツ留学に赴くまでに「団栗」(明治三十八年(一九〇五))、「竜舌蘭」(明治三十八年(一九〇五))以下の小品を発表、自然と人事への哀愁を帯びた観照を端正な文章に刻んだ諸作は、『藪柑子集』(大正十二年(一九二二))に収められている。またその特徴ある科学観を底流として、『冬彦集』(大正十二年(一九二二))、『万華鏡』(昭和四年(一九二九))、『蒸発皿』(昭和八年(一九三三))、『椽の実』(昭和十一年(一九三六))にあつめられたような科学随筆を書いた。

また俳号寅日子の名で雑誌『洪柿』に関係し、松根東洋城と連句を作った。死後『寺田寅彦全集』文学編十六卷(昭和十一年(一九三六))、科学編六卷(昭和十三年(一九三九))が刊行された。初期の作品にはホトトギス派の写実的な文章が多い。後年は文学論、映画論、さらに科学の方法論や科学教育など、文化の広い領域に及んでいる。日本の風土の特殊性から災害現象にも強い関心を持ち、数多くの警世的な文章を書いたが、この方面の文章は『天災と国防』(岩波書店 昭和十三年(一九三九)十一月)に収められている。その災害論は「天災は忘れたころにくる」という寅彦のことは(書かれた文章中にはこの句はないが)に集約されており、今日なおお世に富む。その真意は、過去の災害の教訓をいかしきれない人間の対応を分析したものである。これら数多くの随筆は、いずれもこまやかな観察とゆたかな学識に裏づけられたもので、人々の感性と知性のはたらきを刺激するものがあり、現在まで多くの人々に愛読されている。門下に中谷宇吉郎、藤原咲平、平田森三、安倍能成らがあり、それぞれ寺田の多様な側面を引き継いだ。

安倍能成・小宮豊隆他編『寺田寅彦全集』全十七卷(岩波書店 昭和三十五—三十七年(一九六〇—一九六二))

宇田道隆『寺田寅彦』(世界伝記文庫) 国土社 昭和五十二年(一九七七)三月

太田文平『寺田寅彦』(新潮社 平成二年(一九九〇)六月)

高知県高等学校教育研究会歴史部会編『高知県の歴史散歩』(歴史散歩)三九 山川出版社 平成十八年(二〇〇六)八月

小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』全五卷(岩波文庫)岩波書店 平成五年(一九九三)

松本哉『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』(集英社新書)集英社 平成十四年(二〇〇二)五月

山田一郎『寺田寅彦覚書』(岩波書店 昭和五十六年(一九八一)十一月)

24 鈴木進『文人清方』『画集 鈴木清方』(毎日新聞社 昭和四十六年(一九七二)十月一—五三頁)

25 つじはらのぼる 辻原登 一九四五—昭和二十一
昭和後期、平成時代の小説家。

昭和二十年(一九四五)十二月十五日和歌山県田辺市生まれ。同人誌「第二次文学共和国」に参加。一時休筆するが、昭和六十年(一九八五)十一月「犬かけて」(『文学界』)で注目される。平成二年(一九九〇)上半期、現代中国の村を舞台に、時空をこえた人間の関係をえがいた『村の名前』(文藝春秋)で芥川賞。平成十一年(一九九九)『翔べ麒麟』(読売新聞社)で読売文学賞。平成十二年(二〇〇〇)『遊動亭円木』(文藝春秋)で谷崎潤一郎賞。同年東海大教授。平成十七年(二〇〇五)『枯葉の中の青い炎』(新潮社)で川端康成文学賞。平成十九年(二〇〇七)『花はさくら木』(朝日新聞社)で大仏次郎賞。平成二十二年(二〇一〇)『許されざる者』(毎日新聞社)で毎日芸術賞。本名は村上博。作品はほかに『黒髪』(講談社 平成八年(一九九六)六月)、『家族写真』(文芸春秋 平成七年(一九九五)二月)など。

「辻原登」(『日本人名大辞典』)

26 辻原登「サウダーデのまなざし—清方讀」(鈴木清方『ごしかたの記』改版 中公文庫 平成二十年(二〇〇八)五月 三〇—三二頁)

27 芝木好子「鈴木清方 内面の美を求めて」(『日本の名画10 鈴木清方』中央公論社 昭和五十年(一九七五)十二月 九三頁)

28 坂崎重盛「清方随筆余滴」(『鈴木清方 逝きし明治のおもかげ』別冊太陽 日本のごころ152 平凡社 平成二十年(二〇〇八)四月 一三七頁)

29 坂崎重盛「鈴木清方随筆集」山田肇編(『東京本遊覧記』晶文社 平成十四年(二〇〇二)二月 二四頁)

30 まつおかえいきゆう 松岡映丘 一八八一—一九三八 明治十四—昭和十三
明治から昭和時代にかけての日本画家。

明治十四年(一八八一)七月九日、兵庫県神東郡田原村辻川(神崎郡福崎町西田原辻川)に松岡操・たけの八男として生まれる。本名輝夫。兄に井上通泰・柳田国男らがいる。明治二十二年(一八八九)に上京、初め橋本雅邦に師事する。のち明治三十年(一八九七)山名貫義に入門。大和絵の道に進む。明治三十二年(一九九九)東京美術学校日本画科に入学、荒木寛畝・川端玉章に師事、明治三十七年(一九〇四)同校日本画科を首席で卒業。明治四十一年(一九〇八)同校助教教授。明治四十五年(一九一〇)第六回文展に「宇治の宮の姫君たち」初入選、大正三年(一九一四)第八回文展の「夏たつ浦」は大和絵を新たに解釈したものとして注目を集めた。大正五年(一九一六)吉川霊華・平福百穂・鈴木清方・結城素明らと金鈴社を結成、第十回文展の「室君」は特選首席となった。大正七年(一九一八)から昭和十年(一九三五)まで東京美術学校教授を十八年続ける。そのころより大和絵画風の振興につとめ、大正十年(一九二二)「新興大和絵会」を結成。また多くの優れた美校生を輩出させるなど、大和絵

の刷新に努めた。現今の日本画壇の基礎を築いた。大正八年(一九一九)の第一回帝展から毎回審査員にあげられ、昭和五年(一九三〇) 帝国美術院会員、昭和十二年(一九三七)に帝国芸術院会員。「山科の宿」(大正七年一九一八)「伊香保の沼」(大正十四年一九二五)「平治の重盛」(昭和四年一九二九)「屋島の義経」(昭和四年一九二九)「右大臣実朝」(昭和七年一九三二)「矢表」(昭和十二年一九三七)などの名作がある。昭和十三年(一九三八)三月二日没。五十八歳。墓は東京都府中市の多磨墓地にある。著書に『絵巻物小釈』(森江書店 大正十五年(一九二六)十月)、『日本風俗画大成』一・二(中央美術社 昭和四年(一九二九)二月)、画集に猪木卓爾編『松岡映丘画集』(美術往来社 昭和十二年(一九三七))、国画院編『松岡映丘画集』(国画院 昭和十六年(一九四二)九月)がある。

青木茂・酒井忠康監修『大正・昭和の日本画―東京を中心に』(日本の近代美術) 6 大月書店 平成六年(一九九四)四月)

村松梢風『本朝画人伝』(中央公論社 昭和五十一年(一九七七))

山種美術館編『生誕百年記念松岡映丘―その人と芸術』(山種美術館 昭和五十六年(一九八一)十月)

31 きんれいしゃ 金鈴社

日本画の研究団体。大正五年(一九一六) 文展日本画部の新鋭作家結城素明、鏑木清方、平福百穂、吉川霊華、松岡映丘らと雑誌『中央美術』を主宰する田口掬汀が結成。

翌大正六年(一九一七)二月東京・三越本店において第一回展を開催、自由な研究と個性の表現を旨とし、毎月研究会を開き、新傾向の画風に無理解な文展当局に反省を求め、『中央美術』に進歩的な感想や論説を発表した。大正十一年(一九二二)、第七回展開催後の六月に解散したが、会員はその後帝展(大正八年(一九一九)、文展は帝展と改称)を代表する作家となって活躍した。

佐伯英里子「金鈴社」(『日本大百科全書』)

32 鏑木清方『蘆の芽』(相模書房 昭和十三年(一九三八)六月 一五四頁)

33 注32『蘆の芽』 九頁

34 注32『蘆の芽』 一〇頁

35 注32『蘆の芽』 一〇頁

36 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守校注・訳『日本書紀(1)』(『新編日本古典文学全集』二 小学館 平成六年(一九九四)三月 一九頁) 訓下し文を引用した。「原文」及び「現代語訳」は以下の通りである。

【原文】

古天地未剖、陰陽不分、渾沌如鶏子、溟滓而含牙。及其清陽者、薄靡而為天、重

濁者、淹滞而為地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難。故天先成而地後定。然後神聖生其中焉。故曰、開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也。于時天地之中生一物状如葦牙、便化為神。

【現代語訳】

昔、天と地が分れず、陰の気と陽の気も分れず、混沌として未分化のさまはあたかも鶏の卵のようであり、ほの暗く見分けにくいけれども物事が生れようとする兆候を含んでいた。その澄んで明るい気が薄くたなびいて天となり、重く濁った気が停滞し地となるその時、清く明るい気はまるく集るのがたやすいが、重く濁った気は凝り固まるのが困難である。そのために、天がまずできあがり、地は遅れて定まるところとなった。かくして後に、神がその中に生れた。

そこで、次のようにいわれている。天地が開ける初めの時は、洲や島が浮び漂うこと、ちょうど泳ぐ魚が水の上に浮いているようなものであった。その時、天と地の中にある一つの物が生れた。形は萌え出る葦の芽のようで、そのまま神となった。

37 注32『蘆の芽』 八頁

38 注32『蘆の芽』 六一七頁

39 注6『続こしかたの記』 九〇頁

40 鏑木清方『蘆の芽』(相模書房 昭和十三年(一九三八)六月 五頁)

41 注6『続こしかたの記』 一八九―一九〇頁

※ 本稿は、引用に際し、適宜旧字を新字に改めた。

※ 本稿は、科研費・基盤研究(C)(23531235)による成果の一部である。

(釧路校・准教授)

